Interview

留学生インタビュー

Circle Interviews
学生広報スタッフがインタビュー

マレーシア出身のバーラティ・カツミさんは、多文化社会学部の3年生。「葉 國璽（ようこくじ）」私費外国人留学生奨学金制度を活用し、学業に励んでいます。今回は学生広報スタッフの私が、友人でもあるカツミさんにお話を伺います。

平部桃子（ひらべももこ）さん
多文化社会学部3年

奨学金が支える夢、長崎での充実した学びと留学生活

――まず、留学先として長崎大学を選んだ理由を教えてください。

カツミさん　私にとってもう一つのルーツである日本の文化や自然に小さい頃からすごく興味がありました。なので、大学生活は、日本で送りたいと思い、挑戦しようと思いました。長崎大学を選んだのは、長崎には中国やオランダとの交易の歴史があるので、長崎大学にも多様性を受け入れる環境があり、留学生も充実した学生生活を過ごせると思ったからです。また、日本の戦争の歴史や長崎の原爆について深く知ることで、戦争によって学ぶ機会を失った人々のことを知り、学べることへの感謝が強くなっていくのではないかと思いました。

――長崎出身の私は、早くから平和学習が身近にありました。こうして海外から長崎の被爆の歴史に関心を持ってもらい、同じ学部で一緒に学べるのが嬉しいです。多文化社会学部ではどのようなことを学んでいますか。

カツミさん　西田充教授のゼミ（国際公共政策コース）で学んでいます。外交や核軍縮、安全保障などの国際問題について、英語と日本語の両方を使って議論をするのが楽しいです。ゼミでは核兵器や東アジア周辺国の核の危機について議論しますが、私は東南アジアから来たこともあって少し難しいと感じることもあります。でも、核の傘の下にある日本で、日本人の友人たちと日本に身近な問題について考えたり、議論したりすることは新しい経験でとても意義を感じています。

――留学を踏まえて将来の夢や目標はありますか。

カツミさん　留学前は戦争の歴史や原爆について深く知りませんでしたが、長崎に来てから、被爆者の体験談や、長崎出身の友人から小・中学校で行われている平和教育について教えてもらうなどして、長崎のことを学んできました。また、同世代であるウクライナからの学生との交流も、長崎大学に留学したから得られた経験です。マレーシアは、核保有国ではありませんし、長崎のような経験もしていません。今後も長崎にいるからこそ得られる知識、国際的な考え方を深めていきたいです。そうして将来は、世界の人道的な問題に取り組む政策や外交に携わりたいと思っています。マレーシアの大使館や核軍縮に関わる国際機関にも興味があります。

――私も奨学金をいただいて留学した経験があります。留学先で何をするのか、目標を明確にするきっかけにもなったのですが、カツミさんはいかがでしょうか。

カツミさん　1年生の時に経済的な不安が強く、指導教員に相談に行きました。アドバイスをいただく中で、私も奨学金をいただいて経済面の不安が少なくなれば、安心してより勉強に集中できるのではないかなと思いました。「葉 國璽」私費外国人留学生奨学金は2年間いただいています。実際、勉強にさらに集中できるようになりました。私費留学生の私にもチャンスを与えてくださった葉先生にとても感謝しています。将来は、葉先生のように社会に恩返しできるような人になりたいと思います。残りの2年間の大学生活も頑張りたいです。

国際学寮ホルテンシアで、ルームメイトの誕生日パーティをしました。

2つのルーツを持つバーラティ・カツミさん。父はインド系マレーシア人、母は日本人です。「マレーシアの食卓には、お味噌汁とカレーが並ぶ日もあります（笑）」。

今回、インタビュアーとしてカツミさんにお話を伺って、私自身も刺激を受けました。いつも笑顔が素敵な彼女も、困難に立ち向かっていたこと、努力を続けている姿が印象的でした。友人として、同じ学部で学ぶ仲間としてこれからも頑張っていきましょう!

長崎大学交流会は令和6年度も開催予定です!

いち早く長崎大学交流会の開催案内をお届けします。校友会メールマガジンにご登録ください。

西遊基金

「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、種々の問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援、さらに教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。

西遊基金に関する情報はこちらからご覧いただけます。